

CSRと環境と未来と

今回は、「持続可能性とはなにか」でした。その原典「われら共有の未来」が報告されたのは、1987年。ベルリンの壁崩壊の2年前です。世界にとってそこらがほんとうの「現代」とすらいわれています。怒涛の1990年代、そして衝撃の2000年代……でも変わらないものもあります。今夜、視てみませんか、地球からみるアンドロメダ。かくやからみる満地球。

TBLデータ集計分析センター開設
2008.6

1. モラルサーベイの集計分析
2. アンケートサーベイの集計分析
3. サステナビリティサーベイの集計分析
4. SRIサーベイの集計分析

naruse@tblllp.com
Mobile 090-3256-2966(direct)

お問い合わせは

トリプルボトムラインLLP
〒460-0016
名古屋市中区橋1-17-28
TEL052-332-1187/11
FAX052-332-1187/12

TBL^{LLP}

トリプルボトムラインLLP

Mail: info@tblllp.com

URL: http://tblllp.com

TBL ^{LLP}	TREPLE BOTTOM LINE Limited Liability Partnership	トリプルボトムライン有限責任事業組合
TBLip	CSRは3	ステークホルダーは2
	CSRは3	CSRは3
	CSRは3	CSRは3



ディーセンシーのすゝめ

ディーセンシー deansy は、時と場所と立場(身分)によって、礼儀正しい、上品な、きちんとした、見苦しくない、情み深いなどという意味があります。ありがとうございます。といったら分かりやすいかもしれません。人のことにはそれさえあれば、そう正論をまわらうことがないという事です。CSRの時代といわれる今日、このことを一つのことにもってほしいものです。ずっと、いままで見えなかったものが見えてきます。

Copyright (C) TRIPLE BOTTOM LINE Limited Liability Partnership. All rights reserved.

☆編集室から

CSRニュースレターVol.007をお届けします。次回は2008年10月1日発行予定です。ニュースレター各号は、配布用pdfを用意しています。ご入用の方は、Mail: info@tblllp.com までご連絡ください。

企業の自立

CSRニュースレター2008・07・01

Vol.007

特集 持続可能性とはなにか ～その1～

ローマクラブ「成長の限界」

～現在のままで人口増加や環境破壊が続けば、資源の枯渇や環境の悪化によって100年以内に人類の成長は限界に達する～

世界各国の科学者・経済人・教育者・各種分野の学識経験者など100人からなる民間のシンクタンク・ローマクラブが1972年に発表した報告書の一文です。

システム・ダイナミックスの手法を用い、天然資源の枯渇、環境の悪化、人口の増加、軍事力の脅威などの人類への危機の接近に対して、回避の道を探索する(と)を目的としていました。

当時の世界人口はおよそ40億人、2008年現在の世界人口はおよそ67億人、うち発展途上国人口の占める割合は、やく73%からやく82%へ伸張しています。

「成長の限界」はその後1992年に「成長の限界」限界を超えて、2005年に「成長の限界」人類の選択」が発表されていますが、そのキーワードは一貫して「いかに希望の未来を見出せるか」にあります。世界の持続可能性にほかなりません。

持続可能性とは

持続可能性(sustainability)ということばは以前からあったものですが、それを明確な意図をもって提起したのが国連の意をうけて、ノルウェーのブルントラント博士(Dr.Brundtland)とその委員会がまとめた報告書「われら共有の未来(Our Common Future)」です。

「将来の世代のニーズを充たす能力を損なうことなく、今日の世代のニーズを充たすような発展(development that meets the needs of the present without compromising the ability of future generations to meet their own needs)」

今月の学ぶ「読書」

本を読むことが読書ではありません。自分の心のなかに失いたくない言葉の蓄え場所をつくりだすのが読書です。

～長田弘『読書からはじまる』～



ケヤキ(樺)
別名 ツキ(楓)
ニレ科ケヤキ属の落葉樹
大気浄化能力Aの
環境樹木です。
仰ぐような巨木になり
街路樹として年齢を
刻んだケヤキ並木は
壮観のひとつです。

という持続可能な発展(Sustainable Development)をテーマとしたものですが、主語である「われら」が「人と組織」であり、対象とするのが世界、その社会と環境であったことはいまでもありません。

開発と発展

デバロップメント(development)ははじめ開発と訳されていましたが、開発が環境(environment)の破壊につながりかねないため、発展と改訳されています。開発途上国も発展途上国と改められています。

当初から持続可能性ということと、開発はもとより発展ないし成長ということとは相容れないという指摘がありました。それまでの世界の発展の過程が、地球環境(Global environment)を一方的に破壊していく歴史だったからです。

そうしたこと踏まえて、いまは開発とも発展ともまた成長ともいわず、「持続可能性」とだけいうようになっています。

強いていえば「利用」ということばだけではつかっています。「持続可能な利用」です。

世代間倫理

ブルントラント報告書のこの定義は、「世代間公正(世代間倫理)」ともいわれています。

したがって環境性の側面に焦点があつていようになえますが、持続可能性そのものは、もちろん環境性ばかりではありません。

報告書は、地域間公正(南北間公平)にも焦点をあてて、すなわち南北の地域格差の解消と貧困と飢餓の撲滅なくして持続可能性はないとしています。

ここには社会性の側面は別項とし、環境性の側面について述べていきますが、ひとりと環境といっても、一般的な理解はさまざままで混乱もあります。それを是正しながらすすめます。

一つには、環境性の側面は経済性の側面と不離一体です。それは人や組織にとって環境が、まずエネルギー(燃料)なりマテリアル(原材料)資源の供給元であり、利用のために購入しなければならないものだからです。

特集 持続可能性とはなにか ～その1～ つづき

経済性をぬきにして環境性を語る事ができない理由です。

ちなみに社会性の側面も同様で、社会的な格差とは経済性の側面すなわち富の格差にほかなりません。

環境とはなにか

環境とはなにかという問いは、当たり前のようで当たり前ではありません。なにをもつて環境とするのかという定義を、これまであまり明確にはしてこなかったからです。

たとえば環境と地球環境とは違うものです。自然と環境も違うものです。

わかりやすくするために生物学から生物の環境の定義を述べてみます。「生物が(肌で)認識しうる世界のみがその生物にとっての環境(environment)」です。人でもまったく同じです。

つまり生物や人間にとっての住環境(habitat)が環境なのです。風土(milieu)についてもいでしょう。主体(subject)と環境との一体的な関係性をいうのです。具体的には都市域から農山村、里山や人工林までをふくみます。

したがって原生林や深海、成層圏などは環境ではありません。それは自然の摂理で動いている世界であって、強いて言うなら自然そのものあるいは地球環境に属するものです。

環境というものの範囲を以上のものとすると、環境≡environment(環境)とはの意味するところは、世界の言語で同一です。



ケヤキ(並木)

環境を内部と外部とにわけたとき、人為と自然をわけるとそのラインであり、内部、都市域すなわち人の環境(住環境)とは、この田畑、里山をふくめた範囲です。その外が外部であり、外部の自然林がすなわち森林生態系です。

そこから内部化と外部化という概念も生まれます。

ちなみに内部化とは、都市域に止めて外部に出さないことであり、外部化とは外部に出してしまうことをいいます。

保全と保護

「こ」において、森林生態系へのスタンスが異なります。

都市域内の資源(すでに取り込んだ後の自然資源です)を持続的に利用するということが保全(conservation)と「こ」です。いわば「賢明な利用」です。それは保護という概念とは異なります。そこに原則人の手は入れません。

ただよく混同されます。というより区別してつかわれていません。しかしそれを峻別しておかないと、それぞれの対象にきちんと対応することができません。

どちらがうのかは明らかです。人為の有無つまり人の手をいれるか否かの違いです。

ところですべての自然は人の利用に供するものだと思っている人はいないでしょう。

環境との共生？

環境の範囲を了解するとたとえば「環境共生」ということばの不毛も理解できます。ひとは住環境のなかで環境と共生などしていません。一方的に利用しているだけです。へたすると寄生です。

けれどもそれがわるいわけではありません。ひとたび取り込んで人の利用に供した環境内の生物は、家畜でも樹木でもすでに住環境・都市環境の一員として存在するものです。逆に頻繁に人の手がいらないければ滅びてしまうものです。責任があるのです。

したがって環境は人為と、かつて自然であったものから成り立っています。とはいえもともと自然であったものも今なお自然のままに存在しています。

人為の環境とあるがままの自然、それが現在の世界の姿にほかなりません。

人為の環境は目の前のものですが、目の前になく、人も立ち入らない、あるいはめつたに入らないエリアがあるとき、それがあがるがままの自然であり、人から隔絶する孤高の生態系ないし地球環境にほかなりません。

人為の環境をいう前に、自然という対象の意味と自身をすこのぞいでみます。かつての自然、過去の自然とは、人為が入る前の自然ということです。

自然林とはなにか

たとえば日本の関東から九州にかけての平野部は、自然の状態ではつまり悠久の過去からのことですが全土がシイ・カシ・タブなどの照葉樹林帯です。

特集 持続可能性とはなにか ～その1～ つづき

原始の時代におよそ100%だった自然林が、現在はおよそ40%に減ったという事実が語るものが「成長の限界」であったり「持続可能性」であったりするので(これは近未来にすくなくとも40%から60%へと反転する必要があります)。

しかもその利用に供するエネルギー(燃料)やマテリアル(物質)はどれもが消耗し枯渇していくものです。

無限と思いついで汲み上げていた地下水が、いつのまにか半減してしまっていたと知ることといつしよです。

環境を閉じる

さて、保護と保全を区別し自然林など隔離保護(保存)対象を確認すると、組織の活動範囲がもちろん保全区域範囲であることに気づきます。

人工林・二次林をふくむ区域は都市域として利用します。効率も追求します。体系的なシステムを考えるのが国土の計画ないし都市の計画です。

そこは、都市域ならではのとくに都心に近づくほど緑化というテーマが必須になるでしょう。

都市域内生態系という概念がまちがいに成立します。街区の二次的な生態系は拡大保護というべき保全が必要になります。

しかし以外は外界すなわち自然域としていっさい干渉しません。

これはいかなる人為もない場合に最終相として現出する森林の極相といわれるものです。

そして極相とは、自然がもつとも安定して自己完結している状態とされています。

自然火災または人為で消失した場合、自然に、コケ・地衣類の段階から草原、低木・高木マツ・コナラなどの二次林、高木照葉樹林⇨極相へと遷移していきます。そのそれぞれの段階を途中相といいます。

もし人が存在せずいかなる人為もなかったらこの一帯は、原始はもとより現在も昼なお暗い照葉樹の森であったのです。

そこは、人の喜怒哀楽はないにしろ、中低木から草花の下生え、小動物から昆虫まで、多様な生物の楽園のようなものです。

森林生態系といえます。それは生物多様性を体現する一つの世界、いわば無二の孤高の世界なのです。

人為の影響

先のように自然火災や人為でこの森林がいちど消失した場合は、遷移のプロセスがはじまりますが、ここから人為がくわわると、極相へいたるプロセスが途絶します。

それは多く、人為の技術でした。文明の曙でもありました。

もちろん有害な排出・廃棄を行いません。

ちなみに、大気は地球環境と地続きのものですから保護対象です。湖沼も河川も海域も自然と地続きのものですから保護対象です。

したがってここで隔離すべきことがなにかを再構成できます。自然を隔離することは、実際は都市域側を自然域から隔離することにほかなりません。

生態系保護の本質は、保護すべき生態系に対してすべての人為を「人の側から隔離すること」です。人為系の内部にある生態系に対しても同じです。この観点を都市域の側から「環境を閉じる」といいます。

エンドオブパイプと環境容量

ゼロミッション(廃棄物ゼロ)の定義を組織ごとに立てるといったことは、以上のことから論外です。

廃棄物ほどこへ排出してもどこへ埋立ても、自然に人為を与えます。排気には有害物質ふくんで拡散し、排水には汚染物質が混入して海洋に広がります。温室効果ガスはいうまでもありません。

したがって人為なり都市なりから外界へと接する場所は、かならずしも里山や人工林ばかりではありません。

つまり外界へのエンドオブパイプは、家庭や事業所・工場などの排気口と排水口です。

まず一年生草原の段階で人為的に遷移を停止*させることが農業の技術です。

おなじく多年生草段階で停止させることが牧畜の技術、高木段階でそれが林業の技術ということになります。その高木というのがはスギ・ヒノキのような人工林にほかなりません。

人が自然を取り込んで利用していくこれが人為のつくる産業、すなわち代表的な第一次産業です。

人はそうやって自然林を農地に牧草地に林地にかえ、一方で居住区に商工区に街区にかえていきました。

前者(自然林を自然域、後者 農地・街区)を都市域としておきます。

そして千年単位ともなると、自然林よりそれら都市域の範囲が凌駕する結果をまねきます。

それが現在です。ざっと概観してみます。

森林生態系

国土に占める森林の面積を森林率といいますが、

現在の日本の森林率はおよそ66%、うち国土に占める針葉樹の人工林はおよそ26%、したがって自然域としての自然林は国土の40%ということになります。

森林以外の街区と田畑等が34%、これに人工林およそ26%をくわえた計60%が人為の範囲すなわち都市域ということになります。

*遷移の停止 / 只木良也『森の文化史(281)』

それが先のように大気に河川と海域に接しているからです。

自動車の排気口もまったく同様です。

旧来から「環境容量論*」といわれるものがあります。外界と接するこのエンドオブパイプの外側を「環境容量I」エリアとし、その容量をゼロとしています。

「分解可能な有機物をごく微量蓄積させることは可能であろうが、『環境容量I』は原理的にゼロとする」と定義されています。

環境容量はゼロというこの定義は、過去も現在も生きています。「排出はすべて内部化して外部化しない」という原理です。

環境を閉じるという現実的な施策です。

持続可能と再生可能性

これらを前提として、持続可能性とはなにか、持続可能な環境性とはなにかです。

条件を充たすのは、環境から調達する(すなわち都市域内をつくる)エネルギーとマテリアルが持続可能なこと、輸入し委託し、結果消費し枯渇するものでなく、再生可能なエネルギーとマテリアルに違いありません。

環境性原理にもとづく持続可能性とは、すなわち再生可能性にほかなりません。同義といつていいでしょう。

それはまた社会にもとめられます。持続可能性の社会性の問題です。(次号へつづく)

*環境容量論 / 末石宣太郎『都市環境の鮮生(1975)』